職員アンケート　A＝できている　B＝どちらかといえばできている　C＝どちらかといえばできていない　D＝できていない

②自己評価および外部評価項目（55項目）

自己	外部	項　目	自己評価 職員アンケート	自己評価 実践状況	委員からのご質問 外部評価項目	委員からのご質問 その他の項目	グループホームからの回答
Ⅰ.理念に基づく運営							
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	B	「季節を感じよう家族と共に」という目標の下、ご入居者とそのご家族の思いを聞き、双方がご一緒に過ごせる機会を築いてきた。法人理念は職員会議で定期的に振り返る機会を持っている。	・事業所の理念を教えてほしい。またその理念をどのように職員間で共有されているのか。 ・コロナ禍で出来なかった行事活動がようやく出来るようになり、ご入居者とそのご家族との関係が回復できる機会となり良かったと思う。 ・まだコロナも安心できない状況だが、今後少しずつでも元の暮らしに近づければ良いと思う。		法人理念 ①ゆったりとその人らしさを受けとめる ②常に自分をふり返る ③地域福祉活動への積極的参加と推進 ・理念を介護の場で実践する為入居者の望むこと、その思いを受けとめ、毎年行動目標を定め、課題を理念や行動目標に照らし話し合っている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	▲ A	コロナ禍で外出制限は続いたが、花見や夏祭り文化祭、初詣など四季に応じた行事に、地域の一員として参加する機会が持てた。広報紙は地区の全戸に配布。	・自治会との連携を上手に取られていますが、どのような努力をされているか。 ・時期を見て地域行事にも積極的に参加されている。 ・今後は地域の行事にもっと沢山の方に来てほしい。入居者の皆さんの笑顔が見られるのが楽しみである。 ・入居者の方の状況に合わせた行事への参加は、地域住民の気づきにもつながる良い機会であった。		・七里地区ご近所事業によって、緊急対応を要する有事に備えて、グループホーム入居者の方々の情報を共有している。 ・次年度はコロナ禍以前に実施したことのある自治会様との防災訓練を行いたい。 ・地域の身近な行事にも参加でき、日常の暮らしがようやく戻ってきたことを実感した。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	B	中学校の職場体験学習、介護実習生を受入れ、若い世代に介護職の魅力を伝えた。ふきのとうカフェ（認知症カフェ）や認知症キャラバンメイトの活動に職員を派遣している。		・介護職の魅力の発信につながる機会となる。 ・介護職の人手不足の現在、将来に向けて、このような取組が大事である。	・次年度以降も継続して取り組んでいきたい。
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	B	今年度は全て対面で開催。運営状況、ヒヤリハット・事故・苦情報告、感染対策、職員研修状況等を報告。事故の分析、地域との災害に備えた連絡体制等、意見を基にサービス向上に取り組んできた。	・事業所内の出来事をきめ細かく報告してもらい、内情がよくわかり安心できる。今後に必要な対応が考えられる。 ・事故報告もきちんとされており、それに対する対策もしっかりされているように見受けられた。 ・克明な報告による不断の改善が見られるが、B評価とは厳しい評価だと感じた。		・入居者の現況報告、事業所の運営課題、事故報告、災害時の対応等を話し合うことで、サービスの質の向上につなげていきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	A	自治体の規模が小さく、竜王町職員と顔の見える関係ができている。地域包括支援センターに運営推進会議委員を依頼。町より「地域の身近な介護相談窓口」や認知症カフェの運営を受託。	・町との連携は密に取れており、引き続きよろしくお願いしたい。 ・行政が共有する知見をさらに活かせる工夫が必要である。 ・自治体規模が小さいことで、入居者家族としては事業所との距離が近くに感じられる。		・福祉課からは介護保険制度、感染症予防に対する助言等を受けている。町主催の認知症研修会への積極的参加はもとより、認知症介護事業所としての意向も主体的に伝えている。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	A	身体拘束該当事例はない。身体拘束適正化委員会を年4回以上実施。各事業所の身体拘束の芽になりかねない課題を検討し、職員の意識向上に努めている。玄関は夜間以外開錠。	・マスコミなどで報じられている虐待行為はこんなことが該当するのかと思うが、サービス指定基準は厳しいものか。 ・夜間玄関から出られる方はないと思うが、地域の私たちも気づき、連絡をしっかりしていきた。 ・身体拘束に関する虐待防止の研修に参加し、その内容を内部で共有することが必要である。		・法人内部の管理者会議、運営推進会議の一部を身体拘束適正化委員会の場とし、身体・心理的拘束等について話し合っている。入居者の引起こす混乱行動は専門医に相談し、職員会議で原因について話し合い、入居者の不安解消に努め拘束のない介護を目指している。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	A	法人内部研修や外部研修（法定研修）を活用して、認知症の人の思いに寄り添うケアやグレーゾーンのケアを学ぶ機会を持った。私たちの関わり方や声かけが、入居者にとっては怖かったり、行動制限と感じたりする場面があるという危機感を忘れず、意識を高め続けたい。		・今後認知症が進んだ方の無理な要求が多くならないか、少人数での見守りに限界が出てこないか心配である。	・今後家族、協力医（専門医）、職員間で対応についても十分に話し合う機会をつくっていきます。

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
8		○権利擁護に関する説明と納得 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	B	制度を利用する入居者は現在いない。社会福祉士である管理者は、必要に応じて入居者・家族に情報提供できるよう学びを継続して準備している。職員への研修も会議を通して実施。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	A	契約時は時間をかけて説明し、理解納得いただけるよう努めている。今年度は加算の制度改正があったが、直接説明して同意を得ている。利用料表や入居のしおりは見直しを加えて、分かりやすいようにしている。			
10	（6）	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	▲ A	3ヶ月ごとケアプラン説明時、年1回の個別面談を軸に意見把握に努力。感染症による面会制限のため、直接家族と話す機会は減っているが、随時電話やLINE等で意見交換ができるように努めている。	・家族は「看ていただいている」ので思いを全て伝えられないと思われます。行政も同様ですが、謙虚に家族の声を今後も受けとめて下さい。		・ご指摘のように、ご家族の声を謙虚に受けとめながら、入居者ご本人の介護サービスの質向上にも努めていきます。
11	（7）	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	B	年2回、職員面談では意見や提案を聞く場も設けている。職員会議でグループワークをして意見が出やすいようにしている。風通しの良さ、実行の早さが小規模の強み。休憩の改善、生活環境の整備（ソファやTV等の買い替え）、行事計画等、職員の提案から実施。	・年に2回の職員面談ではタイムリーな改善につながらないように思う。改善提案書等の制度を設けて、その都度職員さんからの意見を取り入れてはどうか。 ・評価がBになっているのは、ケアマネージャーさんも個々の思いや性格などで仕方ないことなのでしょうか。		・毎月1回の職員会議ではグループワークでの話合いの時間をもち、課題改善等について、意見を出しやすい環境を作っている。 ・他者の意見や価値観を否定するのではなく、相手のことを知ろうとする姿勢、意識を面談や会議等の話し合いの場を通して育んでいきます。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	B	年に2回、個別面談を行い、働き方の希望や心配事の把握、目標到達度等を聞き取っている。介護職員等ベースアップ等支援加算が導入され、処遇改善は前進した。現場の思いを吸い上げるためのリーダー層の役割やリーダー層の育成が十分整理できていない。		・個別面談を年に2回されていて、非常に良いと思います。（権利と義務は難しいのですが）	年度末に自己評価を行い、次年度の目標を設定。個別面談をして思いを聴き、心配ごと等の把　握に努めている。介護職員処遇改善支援補助金の算定をてこに、職場環境と処遇の改善に引き続き取り組む。
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	▲ A	コロナ禍にあっても、オンライン環境を整備して研修に積極的に派遣している。認知症ケアの質向上を主に、一人ひとりに適した研修参加を行っている。新規採用職員の育成プログラムを改定した。定期的に面談をし、心配ごとや課題を話している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	B	町内の医療・保健・福祉関係者の勉強会「ぼちぼちねっと」、近隣7グループホーム合同の勉強会、東近江圏域のグループホーム部会を軸に、同業者と顔の見える関係を築き、各現場の生の声に刺激を受けている。		管理者や職員の同業者との交流はぜひ継続ください。	引き続き、継続して行っていきたい。
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援							
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	▼ B	入居から1ヶ月程度は特にコミュニケーションを密にし、職員間で情報共有をし、関係作りをしている。地元出身・在住の職員が多く、昔話や地元の話題に安心感を抱かれる新規入居者は多い。		・強みを今後も生かして下さい。	・入居者の方々のことを知ろうとする姿勢が双方の信頼関係を育むもので、今後も安心感を抱いてくださる関係作りに努めていきます。
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	A	契約前の自宅訪問、面接を重視し、ご家族の思いが理解できるよう努めている。入居後も特に初期は意識して面会時に要望等を聞き取りする。最初の介護計画説明時と、入居3～6ヶ月目に面談を行っている。			

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	A	本人の力、家族を含め本人を取り巻く資源の力を丁寧にアセスメントし、こまめに支援内容を調整している。自宅でのケアマネジャーやサービス事業所にも、経過を見ながら助言を求めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	A	わが家のようにしゃべってもらい、入居者とともに喜び、悩みたいと職員は思っている。ともに家事をしたりしていると、支援される人という思いは自然に消えている。自然な所が、グループホームの良さだと思う。		・グループホームの現況報告の中にある写真で、その様子がよくわかります。	・今後コロナウィルス感染が収束に向かう中で、家族、地域住民の方々にもそのご様子がさらに伝わる機会を築いていきたいと思います。
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	B	ご家族はケアに不可欠な存在。外出、受診介助、物品補充等、家族が関わってもらえるようお願いしている。コロナウィルスが終息に向かいつつある中でも、その時の状況に応じて可能な限り面会の機会を提供できるようにした。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	B	コロナウィルスが第5類に指定されて以降、家への帰宅、家族との外出が実現できるよう支援した。同法人のグループホームにいる知人との交流機会も持てた。夏祭りや文化祭等、感染リスクを下げながら再開した外出もある。	・グループホーム同士の交流はどのような方法で取られていますか。 ・社会や地域情勢を鑑みながら、できる範囲の取り組みに努めていただいていると思う。		・双方の事業所間で、入居者情報が共有できたことが、互いの入居者が昔からの友人であることを知り、再会へとつながった。 ・入居者ご自身の地元の行事に、ご家族、職員と共に出かけられる機会がもてた。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	B	リビングでは入居者間の関係に配慮し、居心地の良い環境づくりに努めている。認知症からくる混乱や不安から、入居者同士が対立する場面もあるが、介護計画によって個々を支援して、解決をめざしている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	▲ B	治療継続を要するため、入院から療養病床への転院されたケースがあり、家族の思いを聞きながら、どこで過ごすことがその方の望むことなのか一緒に考えた。			
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント							
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	A	ご入居者一人ひとりに担当職員がつき、ご本人の意向は日常の関わりの中で把握し、必要な時はじっくりお話しして確認するようにしている。家族の意向は懇談を中心に把握。「認知症だから分からない」と思わずに、その方が困っていること、嬉しいことを知ろうという姿勢でいたい。	・担当制は好ましいが、職員のアセスメントレベルの差がある場合、どのように調整されいますか。 ・入居者の方の居室を見学させていただき、ご本人やご家族の方の思いが伝わってきました。		・経験豊富な職員と経験が浅い職員とが協力し、ミニカンファレンス等の話合いの時間を通じて、アセスメント力向上につながるためのOJTを行っている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	B	入居前後の面接でこれまでの暮らし、認知症発症からの経過等を詳しく聞き取り、記録している。これらを活かして本人との関係を築いたり、サービスの工夫につなげている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	B	本人の能力をあきらめず、力を発揮していただきたいと考え、家事や軽作業を入居者とともに行っている。職員会議では様々な職員の視点を出し合い、それぞれの心身の状態、できること、思いがけない発見等を共有するようにしている。			

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	▲ A	介護職員が自ら担当する入居者の目線でアセスメントをして、ケアマネジャーと話し合い、それを介護計画として形にしている。介護計画は少なくとも3ヶ月に一度は見直し、家族に面談して説明、同意を得ている。	・現場では特にケアマネージャーさんと介護職員さんとの連携を密にお願いします。 ・担当者も共にアセスメントされていることは今後も継続して下さい。		・アセスメントをしっかりすることは、職員のレベルを上げるることにもつながるので、多くの職員が参加し考えられるようにしていく。 ・介護計画の検討は多くの職員が出席し、計画の実施状況もこまめに確認できるのが小規模事業所の良いところです。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	B	記録を詳細に記し、申し送りや職員会議で情報を共有している。ケアの見直しの中心にケアマネジャーがおり、ご入居者を担当する職員とも会議前には事前に申し合わせをしている。		・記録を詳細に記載することは重要ですが、PC入力にするなど、時間短縮、ケアへの時間創出をお願いします。	・新年度より、生産性向上の観点から、ICT機器の導入を行う予定である。
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	B	主治医や訪問看護師以外にも、歯科医師、歯科衛生士とも適宜連携してニーズに応える努力をしている。誕生日月の楽しみの実現は柔軟に取り組んでいる。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	B	毎年地元自治会の日赤奉仕団様による清掃作業や民生委員様によるプランターへの花植えによって、豊かな暮らしの環境整備に繋がっている。又、公民館や地域行事への外出は少しずつ再開した。		・コロナ感染が終息に向かいつつあり、わかすぎの丘の皆様にも地域行事に参加頂きたいと思います。 ・地域の方々との交流を今後も続けて下さい。	・地域の方々との交流は、今後も継続していきたいと思います。その中で入居者ご本人が以前からの知人に出会い、行き慣れたなじみの場所（神社や寺、お店など）に行けるよう、暮らしが少しでも豊かなものとなるように支援していきます。
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	A	入居時に主治医の継続か、協力医療機関への転医か選択してもらっている。現在は全員が協力医療機関による健康管理（月1回往診と月3回の訪問看護）を選択。専門医等の受診は家族の協力を得ながら進めている。	・入居者さんの体調に異変が見られたら、すぐに関係医療機関に連絡を取り対応されていると思います。 ・医療との連携については、契約をされていたりと工夫されていて良いと思います。		・弓削メディカルクリニック様には24時間、365日対応していただき、日頃の相談も気軽にしていただけるので、職員も安心です。
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	A	月に3回の訪問看護により、担当の訪問看護師と連携を密に支援している。入居者の状態もよく把握してもらっている。介護職の小さな気づきも、遠慮せずに質問や相談ができる関係にある。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	▲ A	病院ごとの対応の違いに戸惑うことがあるが、入院の度にこまめに足を運んで関係を作るようにしている。本人や家族と病院をつなぐ役割を心がけ、スムーズなグループホーム復帰を目指している。	・入院後のグループホームへの復帰は今まで多かったのでしょうか。病気の種類によっても変わると思いますが。 ・入退院を繰り返される方はおられますか。		・大半の方がグループホームに復帰されいますが、永続して病院での治療を要する場合、退所を余儀なくされた方もあります。 ・さほど入退院を繰り返される方はおられません。 ・今後も入居者の方々が安心して入退院の治療が図られるように、医療関係者との連携をしっかりと行っていきます。
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	A	希望があれば、家族や医療機関と密な連携のもと、満足できる看取りの介護をめざして支援。入居時に、重度化・終末期ケアに関する指針について説明、同意を得ている。終末期には改めて意向を確認。毎年の家族懇談でも思いを聞いている。職員の達成感も高い。	・以前グループホームで看とられたと報告書で知りました。職員皆様の思いなどを知り、重大な使命を負われているのだと感じました。職員さんに特別な手順ややってはいけないことなどあると思いますが、講習会等はされていますか。		・職員の思いを聴きとどめてくださり、有難うございます。終末期にはケアに対する職員の緊張感も高まります。その中でも入居者の方々が少しでもここでの暮らしが安心できるように支援して参りたいと思います。 ・協力医や看護師の指導を得て、慎重な対応を行っています。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	B	勤務が1人になる時間帯にも緊急対応できる職員体制と、医療と24時間連携できる体制を作っている。採用時に急変時の対応を説明するとともに、職員会議で研修や訓練を実施している。			

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	B	消防訓練は年2回（1回は防災訓練を兼ねる）。自治会ご近所事業による連絡連携体制、防災行政無線設置が実現。非常災害対策計画に基づき、備蓄品のチェックを実施。	・消防訓練や防災訓練には、地域による合同開催や消防署との連携も考えてもらえればと思います。 支援マニュアル等があれば良いと思います。 ・地域との協力体制は強いように感じました。施設保有分や地域保有分の車椅子数の合計が利用者数を上回れば良いと思います。		・ご提案いただき、有難うございます。新年度は地域との合同開催による消防訓練も行いたいと思います。 ・事業継続計画書（BCP）の活用が進展するように訓練実施とともに見直しも行っていきたいと思います。 ・施設内の車椅子保有数は現時点では7台あります。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援							
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	B	認知症の人は傷ついたことを訴えることがしづらい。親しみのある関係が行きすぎて、入居者を試したり、恥ずかしい思いをさせていないか、振り返る意識が大切だと思う。	・感情があるので、人によっては好き嫌いが表面に出ることもありうるが、それを抑えて仕事をされている職員さんの意識に頭が下がります。		・職員の心情を汲み取っていただき、有難うございます。職員も日々、自身の感情をコントロールしながら介護に臨んでいます。職員のメンタルケアにも注視していきたいと思います。 ・日々の入居者のケアを職員間で話合い、振り返ることを今後も継続して行っていきます。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	▲ A	意思表示が困難な入居者が増え、小さなサインや家族の情報、生活歴を支援のヒントとする必要性をより強く感じるようになった。決めつけではなく、本人の思いを見逃さない支援に取り組みたい。		・入居前の生活歴を踏まえた上での個々の特性に応じた支援は良いと思いました。	・入居者の方のことを「知ろうとする」意識をもってアセスメントを行い、個別支援につなげていきたい。
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	A	職員が一人一人のペースに合わせた支援に取り組んでいるため、一人に費やす時間が増え、他の方に介護が終わるのを待っていただかざるを得ない場面がある。だが決まった日課は定めず、ゆったりして柔軟な対応を心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	B	髪形や髭剃りといった日常の身だしなみにも気配りを大切に、衣服はおしゃれを楽しめるよう努力している。化粧品は家族の協力を得て本人の思いに沿うようにしている。		・人と人とのふれあいで、誰もが自己主張できるのは心が弾むと思います。	・日々の生活の中で、入居者の方々が少しでも心弾む暮らしが送れるように支援していきます。
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	B	食の支援を重視しており、毎食自施設調理を継続して、音や匂いを感じながら入居者とともに食事を楽しむようにしている。準備と片付けに入居者も参加。誕生日には好物や出身地の郷土料理を出している。	・以前に施設の食事をいただいたことがある。地元の食材を取り入れ、事業所内で調理されているので、温かく美味しい食事を提供され、入居者の方々も満足されいると思います。 ・その時期のイベントなどに合った食事は、誰もが楽しみだと思います。これからもよろしくお願いします。 ・季節を感じるようなメニューや誕生日メニューが提供されていて良いと思います。 ・職員さんは毎日考えながら調理されていると思います。どうしてB評価なのでしょうか。		・ご近所から旬の野菜を頂くこともあり、都度工夫して調理しています。大根やジャガイモなど、野菜の皮むきに熱中されている入居者のご様子を拝見していると、嬉しくなります。 ・ありがとうございます。ご入居者の思いや声を聞きながら、食事を楽しんでいただけるよう支援に努めて参ります。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	▲ A	体重や嚥下機能、希望等をふまえ、食事形態や量を考えている。水分が少ない方は、種類やタイミングを工夫。協力医療機関の言語聴覚士や栄養士に相談もできる。食事量や水分量を毎回記録。体重測定は月1回。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	▲ B	歯科検診の指導をケアプランに反映しているが、その時の気分によって毎食後全員の口腔ケアは難しい。義歯は毎日洗浄剤で消毒洗浄。必要に応じ協力医歯科診療所の往診が可能。口腔衛生管理体制加算の算定要件を満たしている。			

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	▲ A	高齢化、重度化で排泄用品の使用割合が多くなってきている。排泄記録表を共有し、画一的でない随時の排泄介護、自らトイレに行ける支援を心がけている。	・居室に簡易トイレを設置する等、それぞれの状態に応じた排泄の自立支援が行われている。 ・お一人お一人支援方法が違うと思いますが、今後もその方に合わせた介助をお願いします。 ・個人の思いとは別に体が勝手に動く事もあると思います。咄嗟の判断や行動が必要になりますが、心に余裕をもってお願いします。		・ご入居者個々の排泄状況をちゃんとアセスメントして、その方に合った支援を行っていきます。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	B	下剤を第一選択としないように、牛乳や乳製品を活用している。野菜の多い食事、個別の介護計画で水分摂取を工夫するなど努力。重度化しても本人に負担のない範囲で、トイレで排泄できるよう取り組んでいる。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	B	多くは職員体制から入浴日や時間帯は決めざるを得ないが、週2～3回の入浴を基本に、その日の気分や急な体の汚れがあれば柔軟に対応している」。1対1の介護でおしゃべりもしながら、くつろげるお風呂となるようにしている。	・入浴は1対1で大丈夫ですか。体力も心遣いも大切です。 ・入浴は1対1でなければならいのですか。その時の状況によって変わることもあるのですか。 ・入浴が楽しい時間となるよう、今後も支援をお願いします。		・その方の自立度に合わせて、マンツーマンで行う場合や移動などに、職員が2人で介助を行う場合もあります。 ・「入りたくない」という方には無理に進めることはありません。時間をおいて再度お声をかけるようにしています。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	B	その方の寝たい、起きたい時間に沿って対応。眠れないことが続けば、行動や心理状態の変化も踏まえて対応を考えている。日中は本人の体調や希望に合わせて、居室での昼寝など声かけしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	B	最新の薬情報は職員がすぐに確認できる場所に設置。薬剤師とは気軽に相談できる関係にある。薬関係の事故を防ぐため、表示方法や薬箱の変更といった工夫を続けている。事故を防ぐ3段階確認①薬箱にセットする時に確認する②介助は一人ずつ確認しながら服用する③薬箱を片付ける時に飲み忘れがないか確認する		・薬は体調にかかわる大切なものです。職員の皆さんで内容の共有をして下さい。 ・事故が起こった例はありますが、マニュアルを改善するなど、工夫している印象を受けました。	・ご指摘ありがとうございます。今後も引き続き、薬の事故を防げるように、日頃から職員間で注意してチェックを行っていきます。
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	▲ B	無理せず、できる範囲で家事や軽作業への参加を支援。役割があることが生きがいになるようにと思っている。嗜好品（菓子・酒・煙草等）は、希望者は家族と話し合いながら実現している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している		コロナウィルスが終息に向かいつつある中で、積極的な外出を控えてはいるが、ご本人、ご家族からのご希望に応じて、散歩や外出の機会を継続している。外の空気を吸う良い機会として大切にしている。同法人のグループホームとの交流は、知人と出会う機会ともなって喜ばれている。	・以前車椅子の方の散歩の様子を拝見したことがあります。ご本人は眠っておられましたが、「太陽の光に当ててあげたい」という職員さんの思いに、優しさを感じました。 ・屋外散歩は、季節に応じて視覚、聴覚、嗅覚など体感できる良い機会なので、コロナ禍にあっても外気に接する機会を考えてください。		・人が多勢集まる場所は避けつつ、感染予防を講ながら、外出を段階的に進めたい。 ・ご自宅など、入居者にとって大事な場所への外出は先行して取組を進めています。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している		感染症対策もあり、お金を使用する場に出かけられていない。管理する力のある方、所持することで安心感が得られる方は、ご家族と相談の上、金銭所持が可能。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	▲ B	手紙が届くことや、電話がかかってくることはある。一方で今年度はご本人とも話し合い、一部ではあるが、ご自身のご家族に手紙や年賀状をお出しする機会が持てた。携帯電話の所持者は現在1名。キーパーソン以外の近親者に広報と写真を送っている。		・個人の携帯はプライベートな情報がいっぱいなので、他人が操作するのはちょっと気がひけます。	・施設でタブレット（ipad）を配備し、それを活用してご本人とご家族が動画通話される機会もありました。 ・個人の携帯電話は、ご本人がご家族との通話時にのみ使用されています。

自己	外部	項　目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	▲ A	清潔さと快適な匂いで、従来の介護施設の印象から脱却したいと努力している。日差し、外気に気を配りながら、室温や明るさのこまめな調整を心がけている。四季の花、飾り物で季節を感じていただきたいと思っている。	・季節の花がいつもあると心が和みます。地域でも花植えなどのお手伝いをしたいと思います。 ・運営推進会議に参加するまでの思い込みが一新されるほどの好環境を感じました。		・居間の大きな窓からは田園風景や山々が眺められ解放感があります。春には開花した桜も臨めます。それによって、身近で四季の変化を感じられる工夫がなされています。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	B	リビング・食堂・和室を模様替えしたことで、入居者が以前より自由に思い思いの場所で過ごしている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	B	個人差はあるが、自宅で慣れ親しんだ家具や飾り物等を持参されている。入居後の生活に合わせて工夫しながら、写真を飾ったり、できるだけ居心地の良い空間となるよう努めている。	・ご本人の思いも聞きながら、ご家族の意見や協力も大事になってきます。 ・普段窓は開かないようになっているのですか。		・リビングなどの共用空間以外で、一人でゆっくりと過ごしたい方には居室（プライベート空間）で過ごされることも優先したいと思います。 ・居室等の窓は普段から開閉できるようになっています。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	B	ややこしい表示の目隠し、スイッチ類の解説の表示など、必要に応じて改善。入居者の視点の高さや認知機能に配慮して工夫を続けたい。			